

7 「書く」ことで古典に自信をもたせましょう

中学校の古典指導は、「古典としての古文や漢文を理解する基礎を養い古典に親しむ態度を育てる」とともに、「我が国の文化や伝統について関心を深めるようにする」ことをねらいとしています（学習指導要領解説）。そのために、「音読などを通して文章の内容や優れた表現を味わう」（同）ことが強調されていますが、ほかにも次のような手だてが考えられます。

音読以外の指導の手だての例

- (1) 落ち着いた気持ちで、正確に視写する。
- (2) 読み慣れた後、現代語訳を伏せ、古文だけを見て、現代文に直して書く。
- (3) 古典を鑑賞した文章（中学生向け）を読んだり、映像化または音声化された教材を利用したりして、古典の内容理解を一層図るとともに優れた表現を味わう。
- (4) ある程度読み慣れたとき、古文の内容に関する聞き取り問題やクイズに答えるなどして、一層の理解を図る。

自分の言葉で現代文に置き換える

上記のうち、(1)と(2)を組み合わせた学習課題の例を紹介します。

「おくのほそ道」の学習課題例（光村図書3年、東京書籍3年、三省堂3年、学校図書3年）

「おくのほそ道」の冒頭部分に読み慣れたら、芭蕉になりきったつもりで、次の学習のどれかに取り組んでみよう。

ノートに視写した「おくのほそ道」の冒頭部分を、中学生に分かる現代語に直して書いてみよう。

「おくのほそ道」の冒頭部分を10行以上暗唱し、教科書を開かず古文を思い出して書いてみよう。

「おくのほそ道」の冒頭部分を丁寧に視写しよう。終わったら、現代語に直しながら声に出して読んでみよう。

生徒が取り組んだ例（ の場合）

月日は永遠の旅人のようなものである。それは、終わりになく続いていくものだ。行ったり来たりする年もまた旅人である。李白の詩でもそううたわれている。生涯を舟で過ごす船頭や、馬のくつわを取りながら老いていく馬子は、その日々の生活が旅であって、旅をすまいとしている。昔の詩人たちの中にも、旅の途中で死んだ人が多い。李白や杜甫、西行など、あこがれの詩人たちもみなそうだった。

中学生の自分たちに分かりやすい言葉を選んだり補ったりして書いています。（__線部）

原文では言外に示唆するのにとどめている詩人名を出して、分かりやすくしています。（__線部）

聞き取って書く

古文を「聞き取る」ことも効果的です。次に、「徒然草」の「仁和寺にある法師」を題材にして、「聞き取って書く」例を紹介します。

「仁和寺にある法師（徒然草）」（光村図書2年）の聞き取り問題例

T 読み慣れてきたところで、聞き取り問題にチャレンジしてみましょう。教科書を閉じましょう。ノートに、一行ごとに1、2、3、4、5と、番号を5まで付けてください。

初めてなので、ヒントを出します。メモしても結構です。

1には、何という寺の法師か、「お寺の名前」を書いてください。

2には、その法師はどこへ行ったのか、「目的地」を、3には、どうやって行ったのか、「交通手段」を書いてください。

4には、「少しのことにも道案内はほしいものだ」と兼好法師が思ったのはどのようなことからか、「理由」を説明してください。

5には「これを読んだ感想」を書いてください。

T では、これから、古文を、最初の五行ほどを二回読みます。それを聴いて、ノートに答えを書いてください。4と5は、まわりの人と話し合ってから書いてください。

解答例 1 仁和寺 2 石清水 3 徒歩
4 神を拜むのが本来の目的だから
5 この話を読んで、ほくにも似たところがあるなと思った。
ほくも、よく確かめないで行動してしまうことがあるからだ。でも、本人はけっこう満足していたようである。また出かける楽しみができたとも思えばよいのではないか。

出題内容をあらかじめ予告することで、聞こうとする意欲を高められます。

聞き取ったことをもとに、個人で考えたり、級友と一緒に考えたりすることで、内容理解につながります。

書くことによって理解をさらに確かなものにしていきます。

このように、「聞き取って書く」などの活動を取り入れていくと、「聞く力」の向上を図るうえ大変効果的です。また、音読による学習を生かすことにもつながります。

次に、聞き取り問題をクイズ形式にして、一層楽しく、「聞き取って書く」学習を展開した例を紹介します。

「那須与一・扇的（平家物語）」の例（光村図書2年、東京書籍2年）

T みなさん、読み慣れてきたようなので、クイズに答えて、一層の理解を図りましょう。クイズは全部で三問です。教科書を見ながら、必要に応じて古文に線を引いたり、何で調べれば分かるかなどを考えながら聞いてください。答えはすべての出題が終わってから書きましょう。出題を聞くときに、メモをとってもかまいません。

「聞き取って書く」活動をどのように行うのか、具体的に指示しています。

Q1 与一が使った矢は、どんな種類の矢だったでしょう。また、その図はどこに載っていますか。

Q2 扇の的とくしを絵にかきましょう。また、扇は何色ですか。

Q3 与一の矢は、的のどこに命中しましたか。絵に印を付けましょう。また、その理由を書きましょう。

今回は、以上です。では、必要に応じて調べたり、友達と話したりしながら、20分以内でノートに書きましょう。

矢の種類に着目させ、本文をもとに想像して考えさせます。

絵に描かせながら、本文を正確に読ませようとしています。

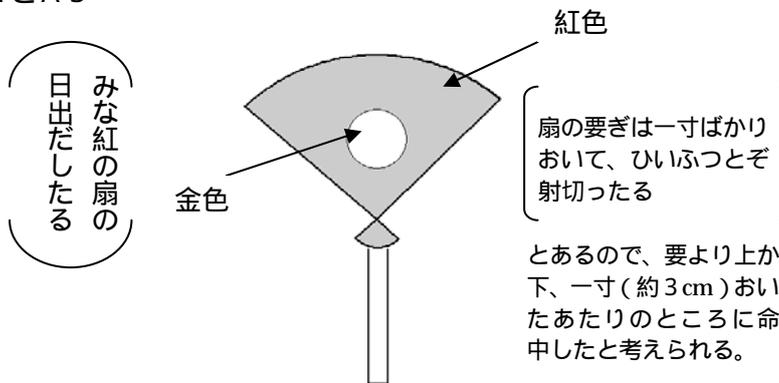


このクイズによって、このあとの学習では、扇が空中に舞い上がってゆっくりと海上に落ちる描写のすばらしさなどに気付かせます。

解答例

A1 かぶら矢

A2とA3



(補足) 原文にあると、扇の的まではちょっと遠かったので、与一は海に六間(10メートル程度)馬を乗り入れ、それでもまだ四十間あまりは(70メートル程度)あると見たことが書かれている。その距離で命中させることは至難のわざである。

小学校の教科書を知ることも大切です

小学校の教科書には、「声に出して読もう」などのメッセージが添えられ、日本語の調べを体感するための発展教材として、次のような文語文が掲載されています。1年生の指導では、生徒がこれらの教材をどのように学習してきたかを確かめることも必要です。

小学校教科書に掲載されている文語の教材例(主なもの)

東京書籍5年下(付録)

「竹取物語」(冒頭)現代語訳付き

「百人一首」山部赤人など四首

現代語訳付き

「吾が輩は猫である」(冒頭)

「坊っちゃん」(冒頭)

「蜘蛛の糸」(冒頭)

東京書籍6年下(付録)

「枕草子」(清少納言)(第一段)現代語訳付き

「平家物語」(冒頭)現代語訳付き

「論語」の言葉 現代語訳付き

光村図書6年上

(本編)詩「りんご」(山村暮鳥)

(発展教材)「今も昔も」「狂言 柿山伏」